
To make the new world

尾田博士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

To make the new world

【Nコード】

N7544R

【作者名】

尾田博士

【あらすじ】

この世界には、

普通のアスカンディア大陸、

大きなオマストリア大陸、

小さなナシア大陸、

という3つの大陸に分かれており

アスカンディア大陸には2つの勢力が、

オマストリア大陸には4つの勢力が、

ナシア大陸には1つの勢力があつた。

その勢力は滅多なことがない限り争うことがなかった。

ごく普通に安全な世界であつた。

しかしある日をさかいに、大変なできごとが起こり始めたのであつた・・・

プロローグ

ある日、ある空に謎の穴ができた。

その穴ができると同時に、いろんなところで魔物が出始め、人々を襲うようになった。

そんな中、ある街にも、魔物が現れ、人が襲われどんどん人口が減っていく。

その街に、二人の青年が立ち寄った。

二人は、魔物を退治するために、旅をしているのだ。

殺された仲間のため・・・

一人は、名前を、青木青龍という。両手には、形の異なる。刀を持っていた。

もう一人は名前を、アルバソニックと言った。両手には、銃を持っており、ちよつとばかり、改造を施しているようだ。

そんな二人の前にも、襲われてる人がいた。

「さ、助けるか・・・」

この静かなしゃべり方は青龍

「だね」

陽気な喋り方はソニック。

こうして二人はその魔物に立ち向かうのであった。

くプロローグく（後書き）

どうも^^初めまして尾田博士です。

今回はアクション（って言うのかな？）の小説を書こうと思います。

主人公

あおき 青木 せいりゅう 青龍

双剣の使い手。日本人。

物静かで、あまり騒がない。なかなかの切れ者。 17歳
サブ

アルバソニック 二丁銃の使い手。外国人。

陽気な性格。優しく、場を盛り上げるのが上手。そんな陽気性格とは裏腹に、キレると怖い。 17歳

などのキャラクターを使って、作品を書いていこうと思います。
他のキャラなどは未定です。

途中で書くのが難しくなり、諦めたりするかもしれませんが、
温かい目で見えていただけるとうれしいです。

今回はこちらへんで、終わらせていただきます。

それでは^^

第1話 初！！まともな戦闘

「さっきの敵は手ごたえ無かったねー青龍^{せいりゅう}」
と、ソニツクは青龍に言う

「…だな」

青龍が答える。

手ごたえがない・・・それもそのはず。

それは、最下級の敵なのだから。

だからと言って、油断はならない。

「一応」魔物なのだから。

（数分後）

「ようやく最初の町か・・・」

青龍が言う。

しかし、見渡す限り人気はない。

それ以前に人気どころか、「町」という形を保ってないのだ

「うーん、ここも魔物に荒されたみたいだねー」

町に入り、周りを見渡しながらソニツクは言う。

ドガン

「！！？」

二人は驚きながら、周りを見渡した。

町の奥の方で爆発音がしたのだ。

二人は走って奥の方へ行く。

「魔物か・・・？」

青龍が聞くと

「だろうねー」

軽くソニツクは答えるのだ。

ヒュンッ

上空から針が10本ほど。それも長くて大きい。

二人が上を見上げると空を飛ぶ魔物がいた。

「チツ、あいつを倒さないとダメなのか・・・」

舌打ちをして青龍は双剣を構える。

「邪魔は勘弁だよ」

パン！！

ソニックが放った銃弾は、見事に空を飛ぶ魔物へ命中。

「流石銃の名人・・・」

「それほどでも」

二人が話していると、次は目の前に大きな魔物・・・いや怪物が現れた。

「貴様ラ・・・戦士力？」

怪物が聞いてくる

「まあそんなところだ。答えてやったんだ、黙って逃げ・・・冷凍
円」<sup>フリーズサ
イクル</sup>

そう唱えると、怪物の周りには、白い円ができ、一瞬で氷の柱になった。

そして、青龍は怪物が中にいる、氷の柱を一刀両断の元に切り落とした。

「ヒュウッ カッコイ」

ソニックが口笛を吹きながら言う。

「茶化すなよ」

青龍は冷静な口ぶりで言葉を返した。

「マダ・・・安心スルノハ・・・早イ・・・」

「なにっ!？」

驚いて、青龍は後ろを向いた。

切られたはずの怪物がしゃべる。上半身だけのようだ。それを見た青龍は少し安心したようだ。

「俺ヲ倒セテモ、マダ上ニハ上ガイル・・・」

と言い残し、怪物は息絶えた。

「上には上・・・か」

「気にせず、行こうよ」

「・・・だな」

ソニックにそうは言われ、こう言い返したものの、青龍はその言葉を胸に刻んだ。

その頃、ある家の裏では

「な、なんなんだ、あいつらの強さ・・・」

太った男が喋る

「黙りな、奴らの後についてけば何かあるかもしれない・・・ついて行くよ!!」

女の人が言い、歩きだしたのを見て、太った男もそれにつられ、ついて行った。

第2話 ストーカーなんですか!?

ソニックと青龍の二人は次の町を目指し荒れ果てた道を歩いていた。やはり魔物が出る。

二人にとつてはもう限界。

1時間歩くだけで、60体もの魔物が出現するからだ。もう、SPだけでなく、HPも限りなく減っていた。

「ああ、疲れたよ、青龍・・・もう歩けない」

ソニックが座り込む

「残念ながら俺も同じだ・・・ん？」

青龍も同じように座り込み、後ろを向いた

「どうかしたの？」

ソニックが尋ねる

「さつきから何か、後ろの方から人氣が・・・」

青龍が言う

「それは、自意識過剰なだけなんじゃないの？まあでも本当に誰かついてきているかもね。ちよつと見てくるよ。」

ソニックは銃を一つだけ取り出した。

岩の方へ銃口を向け・・・

パン

そう、岩を撃つたのだ

ドォーン

これは、見てくるとは言わない。探るというのだ。

岩は一気に崩れ、人影が見える。

「ゲホッゲホッ・・・」

砂煙の向こうで咳が聞こえる

「ビンゴだね」

ソニックは乗り気で言った。

「それは、見てくるって言わないぞ・・・」

青龍はツツコむ

「ちよつと今銃で岩壊したの誰！？服汚れちゃうじゃない！！」
砂煙も消え、壊れた岩の向こうから女のひとの声が聞こえる。

「あ、僕ですけど？」

ソニツクは軽く言う

「ちよつと君！！服のクリーニング代払ってもらうからね！！」
女の人は、ちよつと怒り気味に、言った。

「いや…そこじゃないと思うぞ…ツツコむところ…」

青龍はまたもや、さりげなくツツコむ

「それ以前になんで…お前達はこんなところへ？」

青龍が聞く

「お前らをつけてきたんだぜヒツヒツ」

太った男の方が答える

「笑い方キモいから気をつけてね、それってストーカーでしょ？」

ソニツクが毒舌を交えて二人に尋ねる。

「ストーカーに決まってるでしょ！！あんた達をつけてきたんだからって…って違うわよ！！」

女は何が面白いのか、一人で漫才をしている。

「あ、わかったー、僕たちの仲間になりたいんだーそうなんですよー？」

ソニツクが言う

「ま、そういうことでいいわ！！仲間になってあげるわよ！！」

女が言う

「姉貴が言うのなら、俺も仲間になるしかねえな…」

太った男も言う

「なら、名前を頼む…俺は青木青龍だ。」

「僕は、アルバソニツク！」

「私は、イリス・エリー」

「俺はマイケルジャクソン！！」

一通り名前を出したところ青龍が

「おい、そのデブ…殺されたいのか？本名をしつかりと言え」

「あ、ご、ごめんなさいい トーマス・エリーですからー殺さない
てくださいね」

トーマスが言う。

「よろしくな…それじゃあ行くぞ」

と、青龍は言い、一行は次の町を目指し歩きだしたのであった。

第2話 ストーカーなんですか！？（後書き）

キャラ設定

イリス・エリー

女で、武器は弓

盗みが得意。やさしいが、おせっかいなところもある。 17歳

トーマス・エリー

男で、武器は大剣

太っている。体系通り、力持ちで、重いものを持つのは得意中の得意。 16歳

第3話 新しい街でやっちゃった♪

かれこれ、以前の町から、5日間歩き続けたところ。ようやく新しい街についたらしい。

「この街は被害があまりないんだな・・・」

青龍が言うとソニックが

「でも静かだね・・・」

そう、とても周りが静かなのである。

「地図によると、サイレントシティ静かなる街サイレント・ヒルって言う名前らしい。

ここには、あの静かな丘があるらしいわ」

イリスが言う。

「じゃあ、その丘に行ってみようよ」

「・・・だな」

「そうね」

3人は同じ意見も

「えー俺は飯が食いてーなあーめえーしいー」

「「「黙れ」」」

そういうと、3人は一斉にトーマスを蹴飛ばした。

ドーン

パラッパラッ・・・

蹴飛ばされたトーマスは、近くにあったビルに食い込んだ

「あ…やっちゃったね…」

「逃げるぞ…!!」

タッタッタッタ

「お、おいー俺を置いてくなよー」

その頃、サイレントシティ魔界では

「魔王様、静かなる街に、勇者達が集まっているようですぞ」

魔王の側近らしき者が言う。

「そうか…なら、奴らを送ろう」

デーモンスピードアタックカーサード
魔物特攻3番隊を…

隊長のデビル・デーモンを呼べ」

魔王が言う

「御意」

その頃、サイレントシティでは…

「トーマスを蹴飛ばしてから、10分後」

「なんとか、この店に入りこんだね…」

「ああ…そうだな…」

「じゃあどこに座りましょうか」

「そうだな」

4人…あれ？

「「「お前いたの!?!?!」」」

トーマスにむかって3人が一斉に言う

「おったわ!!間一髪で逃げてきたわ!!」

トーマスは怒った口調で言う。

「そうか…なら良かった」

こうして、ビルを一つ壊したが、みんなが集まったのだ。

ビル修理費6万ペラ

第3話 新しい街でやっちゃった♪（後書き）

どうも尾田博士です^^ここまで一気に投稿してしまいました・・・
なんかじつとしていられなくてww

読む方には苦労もあると思います。すいません

さあ、最後にでてきた、ペラ。

1ペラは日本円にして、50円。

ということは、 $60000 \times 50 = 3000$ 万ですかね？

暗算です。サーセンw

では、今回はこちらへんでー

第4話 魔人化（デビルベルソナ）

4人は店の中で飲み食いしていた。

「外が騒がしいな…何かあるのか？」

青龍が言った。

「じゃあ俺が見に行つてきますね、青龍さん！！」

デ…いや、トーマスが言った

「勝手に行けよ…」

さらっとひどいことを言った気もするが、そこは気にせずに、トーマスは店を出た

「ウワアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

「トーマス！？」

ソニックが何かを感じて、外に出て行つた。

青龍と、イリスもそれについて店を出る。

「魔物め…この街は壊させねえぞ！！くらえっ波剣！！」
ウェーブソード

トーマスの大剣から、波のような、気功はが繰り出される。

魔物は真つ二つに斬れる。

しかし、その二つの斬れた魔物の切り口から、半身が生えてくる。

セルフヒーリングスキル
「自己治癒能力だと！？」

トーマスは驚く。

「おいお前！！俺達も手伝うぜ！！」

「俺もだ！」

「俺も俺も」

「私たちもよ！！」

「みんなで魔物を倒そうぜ！！」

「俺たちも行くか…」

「そうだね」「そうね」

青龍の言葉に、ソニックとイリスが反応し、歩きだす。

みんなが一斉に攻撃へ飛びかかる。

「トーマス…俺の援護をしてくれ…ソニック射撃は頼むぞ…」

「「おう!!」」

「それじゃあ行くか…フリーズソード冷凍剣…」

青龍がそう唱えると、双剣は氷にまと纏われた。

「パワーアタックなぎ倒し!!」

バーストクイックトリガー

「炸裂早撃ち!!」

トーマスもソニックも呪文を発動し、魔物を攻撃する。

フレイムアロー

「火をまとう矢!!」

後ろの方でイリスが弓矢を放つ。

ドガン

見事に魔物は粉々になった。

『よっしゃああああああああああ』

皆が歓声をあげる

「喜ぶのもそこまでだ…」

上空から何か声が…

デストラクションレーザー

「破壊光線!!」

ドガン!!!!!!!!!!!!!!

一瞬にして、街の一部は破壊され、破壊された区域にいた人や、勇者達はすべてチリとなった…

「おい…お前…俺達の仲間を…」

ギユインッ

「ちょ、ちよつと、青龍の様子がおかしいんだけど!!なんか、黒いオーラを纏ってて、

目が赤色…何か悪魔を背後に背負ってる感じになってるわ!」

デビルベルツナ

「あれが例の魔人化…」

「ヒャッホオオオオオオオウ、死ね!!死ね!!死ねええええええええええええ!!」

ドガアアアアアン

デビルデーモンが街のビルに叩きつけられる。

「H A H A H A H A H A H A血が足りねえなあ!!」

第4話 魔人化（デビルペルソナ）（後書き）

どうも尾田博士です

さあ、またもや更新してしまった…

今回出てきた、魔人化。

実はあれ、驚異的な破壊力やスピードを持つんですが、欠点がただ一つ。

それは、次回で明らかになります。

ではでは

第5話 トモダチ

「魔界」

「魔王様！！今回の作戦は大成功ですな！！」
側近の者が言う

「ああ、これで奴らの動きは封じれる……」

魔王が言った。

「サイレントシティ」

「お前らもまとめて殺してやるよおおおおおヒャハハハッハ

ハハハ」

デビルベルリナ

魔人化した青龍が言う。

「お前に殺^やられてたまるかって」

「そのとおりね」

「だな」

そう、青龍は魔人化の制御が効かないのだ。

3人は一斉に攻撃を繰り返す。

「仲間が危なくなったら、仲間が助けだすんだ！！それが、

パーティーってもんだろ青龍！！」

ソニックは青龍に声をかける。

「だめよ……もうアイツには声は届かない。

戦って目を覚まさせるしかないの！！」

その言葉が届かないことをイリスは悟った。

「アンタを助けるためなら何だってするぜ……」

トーマスは太剣を持って、青龍の前に立ちはだかる。

ウェーブソード

「波剣！！」

バーストクイックトリガー

「炸裂早撃ち」

フレイムアロー

「火をまとう矢」

ウェーブバーストフレットフレイムアロー

波、炸裂弾、火矢は、一緒に青龍に当たる。

「ああん？効かねえなあ…」

攻撃つつーもんはこうやるもんだぜえ！！フリーズソード冷凍剣！！」

冷気を纏まとった双剣で地面をたたく。

気功状になった、冷気が3人を襲うのだ。

ドガーン

「ぐわっ」

バタッ

「おいっ、トーマス！！イリス！！目を覚ませ！！」

ソニックは必死に声をかける

「これでおしまいだあ！！デストラクションレーザー破壊光線…ウッ」

ドグンッドグンッ

「！？」

友人を殺してはいけないというかすかな本心から、破壊光線は打てずにいた。

そう、青龍の本心が魔人化の心を跳ね返し始めたのだ…

「グッ…」

バーストブレット（頼む、炸裂弾を撃ってくれ…）

青龍は心の中で念じた。

「僕が目覚まさせてあげるよ…バーストショット炸裂撃ち！！」

パアン！！

ブレット放たれた弾丸は魔人化の青龍を貫いた。

それと同時に青龍の魔人化は解かれ、地面に倒れこんだ。

そして、ソニックも同じように、地面へ倒れこんだのであった…

第5話 トモダチ（後書き）

どうも尾田博士です。

これで、魔人化は抑えられましたね。

おそらくどこかでまた、魔人化を使うときは大丈夫でしょう。

きつとねwww

魔人化の欠点は操れない以外にもあるんです。体力の消費が早いことです。

一つ一つの技が強力すぎて、体力を消耗しやすいんです。

操れないという欠点は最初だけですから。

では、

第6話 新しい仲間が増えたんだけど！？

魔人化との対戦で、4人は全員倒れた。

その4人はある街の城へ運ばれた。

街の名前は、アローサルと言った。

城の名前を、^{リアル}真・アローサル城と言った。

今は4人ともその城の寝室にいる。

ムクッ…

「ん…ここはどこなんだ…？」

青龍は真っ先に起きて、周りを見渡し、最後は自分を見た。

「俺は一体何を…？」

「青龍が魔人化^{デビルベルソナ}で街を壊そうとしてたから、

僕達が青龍の目を覚まさせてあげたんだ。」

ソニックも起きていたようだ。

「そうか…わるいことをしたな…すまない…そして、ありがとう。」

青龍は頭を^{こっぺ}たらしたまま動かなかった。

かれこれ30分後には、皆は起きた。

その時、城主…いや王様のマクロールが会いに来た。

「皆大丈夫なのかの？」

「大丈夫ですよ。」

「そうですか、なら良かった。

実は折り入って皆様にお願ひ事ありまして。」

急に王様が本題へと話題を移し替えた。

「私の娘と一緒に旅へ連れて行ってくれんかのう？」

娘の名前はサ・モン・リーフと言います

召喚獣を操ることができるので、

お役にたてると思います。ダメですかの？」

王様が聞いてくる

「王様の頼みとあれば…断れないな…」

「だね」

「そうね」

「だな」

全員意見が一致したということで、
新しく仲間が増えたのであった

「みなさんよろしくお願いします!!」

リーフが言う

「ヨロシク」

「さあ…次の目的地はどこだ？」

青龍が目的地を言う

「あ、あのその前に、みなさんの名前を…」

「すまん…忘れていた…俺は青木青龍。」

「僕はアルバソニックだよ」

「私はイリス・エリーよ」

「俺はトーマス・エリーだ」

一通り自己紹介を終え、少しばかり雑談をして、目的地を決めた。

「次の目的地はイーダ大平原だね」

ソニックが目的地の説明を終え、パーティーは歩きだした。

第6話 新しい仲間が増えたんだけど!?(後書き)

どうも尾田博士です。

1日で6つも更新。

どんだけ暇なんだよwww
って思われますね。

では、新キャラ紹介

サ・モン・リーフ

女 武器は杖。可愛い顔立ちで優しい。仲間を傷つけられるのが許せない。17歳

ではでは

第7話 何が起きたし

旅をする5人は次の目的地イーダ大平原を目指し、旅をしていた。そんな途中の道のりで、ある男が現れた。

名前をコーダ・ルゼフ

というらしい。

何やら見せたいものがあるということであつていくことに

「ルゼフさん…見せたいものって何なんですか…？」

青龍が問う

するとルゼフが

「昔の勇者の石碑だ」

（5分後）

「これがその石碑なの？」

ソニックが尋ねる

「ああそうだ」

ルゼフが答えた。

「私はここに石碑があると知った。そこで私は考えたんだ。ここにある石碑と一緒に…君たちを殺せばいいと…！」

ルゼフの風貌はどんどん変わる。

「お前クレイジーかよ。」

トーマスが言う。

「戦闘？受けて立ちましようよ」

イリスが言う。

「私に勝てるものならかかってこいよ！」

ルゼフが言う。

ファイヤーブレットショット

「炎弾撃ち…！」

「トーマスあれをやるぞ…」

「了解…！」

青龍とトーマスが連携をとり

「クロスッ…ブレイクッ!!」

ファイヤーブレットショットと、クロスブレイクでかなりのダメージを与えたようだ。

「よし…このまま押し切るぞ…」

青龍が言う

「私が決めるわ!!火をまとう矢!!」
フレイムアロー

イリスが呪文を唱え矢を放つ。

しかしその矢はルゼフに受け止められてしまう。

「体も温まったしそろそろ本気でいくぞ!!」

とルゼフ。

「望むところだね、

あれだけでくたばってもらっちゃ面白くないからさ」

ソニックが言う

「調子に乗るな若造がああああああああああ」

周りに白いオーラをまとうと、まわりの地面が割れて少しずつ浮き

出した

ロックブラスト
「破壊岩!!」

ルゼフの技だ、浮いた岩を相手の方へ操って投げる技。

クイックトリガー
「早撃ち」

ソニックが早撃ちで、岩を壊していく。

「残念だな…こっちには天才的なガンナーがいるんでな…」

青龍がソニックをほめるように言う。

「じゃあ、最後は任せるとするか…リーフ例のアレ頼む…」

青龍がリーフに任せ下がる。

「リーフ行きます!!アライト召喚!!」
サモン

そう言うと、地面に穴ができ、そこから雷をまとった、魔物が出てきた。

「アライト、サンダラ!!」

『アライト』といわれる召喚獣がサンダラを唱え、ルゼフに向かって撃つ

ルゼフは一瞬にして、倒れた。
立ち寄ってしまったところ出て、イーダ大平原を目指す。イーダ大
平原まではあと少しであった。

第7話 何が起きたし（後書き）

どーも^^ 尾田博士です。まさかの7話更新 W W W W W W W W W W
今回は召喚獣が出ましたね。

それに新技ファイヤーブレットショットに、クロスブレイク。
いやーとても強力な技になりそうです。

では、キャラ紹介

アライト

♂ F F というイフリートが、雷属性をまとった感じ。
必殺技は、稲妻破壊光線。
サンダーボルト

では

第8話 真実。

ルゼフとの戦闘を終え、イーダ大平原へと向かう5人は、少し休憩をしていた。

「イーダ大平原…懐かしい名前だな」

青龍が言う

「何かあったの？」

リーフが聞いてくる

「育ち故郷…と言った方が良かな…」

青龍は話を続ける

「実は俺…大平原で育ったんだ…」

幼い頃に親父は旅に出て帰ってこない。母親は病死…

そこで引き取ってくれたのが、大平原にいた、伯父のルシエフさ

んだ…」

青龍は話を止めた

「そうなんだあ…じゃあ想い出のつまった大草原だね」

リーフは言う

「そこで、僕と青龍は出会ったんだよ」

ソニックが割り込んできた。

「だな…」

青龍はそう言い、また大草原へ向かって歩き出した。

そして、3時間後。

「ようやくついたなー大草原ー!!」

トーマスが先陣を切って言う。

「ちよつと行きたいところがあるんだが…」

青龍が言う

「伯父さんのところ？」

リーフが聞く

「ああ…挨拶をしたくてな…お前らだけ先に行ってもらっても構わ

ないんだが…」

青龍は言った

「じゃあ先に行ってるから追いついてきてよ青龍」

ソニックは言う

「おう…」

青龍はそう返事をして、皆と別れた。

青龍は、伯父さんのところに行くまで何体もの魔物にあった。
魔物全員を斬り倒す。

そして、ようやく伯父さんのところへ着いた

「懐かしいな…この家。」

青龍はそう言っ、ドアを叩いた。

その数秒後、ドアが開き、中から伯父さんが出てきた。

「お久しぶりです…ルシエフ伯父さん…」

青龍が言う

「おお、久しぶりじゃのう…青龍。まあ、立ち話もなんじゃろう、
中へ入れ」

ルシエフはそう言い、青龍を家の中へ招いた。

二人は椅子へ座ると、ルシエフが

「青龍よ、何か聞きたいことでもあるのじゃろう？」

「良くわかりましたね…ルシエフ伯父さん。」

その聞きたいことと言うのは…

俺の親父が死んだって言うのはうそですよ？」

と青龍が尋ねると

「そのとおりじゃ、お前の父親は死んではおらん。

あの空の穴を作った本人なのじゃから。」

「！？…どういことなのですか？」

青龍がルシエフに聞く。

「あの穴は、魔王が生きてるからできるのじゃ、

旅に出たお前の父親は、仲間と一緒に魔王を倒した。

じゃが、その父親が穴を作ったということは、魔王になってると

言うことじゃ。

どういうことかというところじゃのう…
魔王を倒すには、ラスト・ザ・アルティメットスキル最終究極技

という、技を取得する必要がある。

その技を覚えるためには、一緒に旅をして奴一人を…」

まだ話は続く

「生贄にささげねばならん。
いけにえ

その生贄に捧げられ、ラスト・ザ・アルティメットスキル最終究極技になったのが

お前の父親じゃ。

そして、その最終究極技になった者が
ラスト・ザ・アルティメットスキル

次の魔王になるのじゃ。

これがずつと連鎖され、100年前から、この連鎖はずつと続いているのじゃよ。」

と、ルシエフの長い話は終わり、少し別の話をして、青龍は、皆のところへ急いだ。

（俺の親父が魔王…なら俺が助けるしか…！）

そう思いながら皆の元へ急ぐのであった。

その頃4人の目の前には敵がいた。

「才前ラヲ通スワケニ八行力ナイ」

片言にそう言つて、4人に襲いかかった。

（30分後）

「ダカラ言ツタダロ…才前ラジャ俺ニ八勝テナイ」

魔物はそう言い残し去って行った。

その30分後にようやく青龍は4人の元へたどりついた。

「お、おい皆…！」

青龍は怒りと憎しみを覚えた。

「許さねえ…」

青龍は周りにオーラを纏い始めた。

「や、止めなよ…青龍。」

ソニックがかすかに動く手で足をつかんで止める。

「ソニック！！大丈夫なのか？」

青龍は大きな声をつい出してしまった。

「ああ…僕はね、ほかのみんなはどうかな？」

ほかの3人もしっかり息をしていた。

こうして、5人はここで休むことにした。

第8話 真実。（後書き）

どーも尾田博士です。

無事何もなく8話まで書き終えました。

さあ、今回ですが

真実、出ましたね w

もうちょっと遅くなるかなあと思ってたんですが、出ましたね w w

8話で w w

じゃ、今回はこちらへんでー

第9話 港へ

「みんなもう、立てるか？」

青龍が皆に聞いた

「大丈夫だね、リーフの白魔法が役に立ったから」
ソニックが言う。

「それじゃあ行こうぜえ、奴をぶっ殺しになあ」
とトーマス。

「次あつたらフルボッコ確定ね」

続いてはイリス。そして…

「みんなであいつを倒しましょうね！！」
とリーフが言った。

そして、みんなは歩き出す。

「ソニック、次はどこ行くんだ？」

青龍がソニックに聞くと

「一応、この大陸を離れてオマストリア大陸に行こうかなーって思
うんだ」

ソニックが言う

「そこで何をすんだい？」

イリスが聞くと

「魔物退治を手伝ってもらうのさ」

ソニックが答えた。そして、話を続ける

「そのために、北側の港にいなきやならない。

ここからざつと10日くらいかな？

早めにつけば一週間と大きく差がでるけどね」
と話を終えた。

「じゃあ、早く行くことにしたことはないんだな」
トーマスが言った。

「じゃあ行くか、港に」

青龍がそついうと、歩き出す。

ほかの4人もそれを見て、青龍について行く。

「ところで、オストマリア大陸で

誰に魔物退治を手伝ってもらうんだ？」

青龍はソニツクに聞いた

「もちろん、王様だよ、全勢力のね！！」

ソニツクは軽く答えた。

しかし、そう軽くはいかないだろう。

と青龍は思っている。

なぜなら、あの大きな大陸には、4つの勢力がある。

一つの勢力に助けを求め協力してもらうにも大幅な時間が必要だろう。

しかも、大陸の各地にちらばる勢力の王に会うまでにも大幅な時間がかかる。

1ヶ月で終わるような行動じゃない。

それに、戦争を起こしてないもの、

一応4つの勢力は敵対国なのである。

その国々が

「協力して何かを起こした」

という事は、過去に1度もないからである。

各勢力は、

「自分たちの問題は自分たちで解決する。」

という考え方をもっているのだ。

そんな考え方をもった勢力…いや王を説得するのも時間がかかる。

やはり、1ヶ月で終わるはずがない。と断言ができる。

そんな長い時間をかけるより、「自分たちで倒す方が早いのではないかな？」

と思うのが普通だからである。

「そんなめんどくさい事をするより、

俺達が直接魔界へ行って戦えばいいんじゃないのか？」

トーマスがソニックに聞く

「僕たちの能力でそんな事ができるとでも？」
とソニック

「それは無理ですね」

リーフが言う

「だね」

イリスも賛成する。

こうして、また5人は歩き出した。

「ところでリーフ、お前の召喚獣って

特定の寺院でしか手に入らないって聞いたんだが
どっかよらなくて大丈夫なのか？」

青龍はリーフに尋ねる。

「そうですね、この大陸には寺院はありませんし、

オマストリア大陸に行けば2つ、3つは寺院があると聞きました
から」

リーフが言う

「そうか、それならいいんだが」

青龍が言うと、ソニックが

「そういえば、青龍って喋り方変わったね」

あんな静かな喋り方だったのに、今は常人のようにね」

ソニックが言った

「いや、前から常人なんだが」

青龍が答えた

「あ、喋り方が常人じゃなかったのにね」

ソニックが言う。

青龍は疲れたようにソニックに適当に言葉を返した。

こうして、5人で港を目指すのであった。

その時はまだ、5人は港までの道のりがもっと長くなるとは知らず
に・・・

第10話 新たな扉

「ここはどこなんだろうな…

何か森みたいだが」

青龍が言う

「いや、森みたいじゃなくて、

森なんですよ」

安定の丁寧語を使うリーフ。

「さすがに1日10kmも歩いていたら疲れるよね」

それも、魔物との戦闘もあるわけだし」

とソニック

「俺はお前がなぜそこまでぴんぴんしてるのが

理解できん」

青龍が解せぬ顔で言うと

「いつも通りっしょ、ソニックさんは」

トーマスが言う

「そうだね、いつもこんな感じさ」

ソニックがトーマスの言葉を自分のものにしたようだ

「おっと、敵のおでましのようだよ!!」

イリスはそう言って、弓を構え矢をセットする。

「貴様、勘が良いな。」

影から出てきた魔物が言う。

「じゃあ、黙ってたばれ」

青龍は良い、一瞬にして消えた。

「じゃあな」

そして、双剣を握る。

「!？」

とつさに魔物は反応して、後ろを見る。

「おせえよ」

ズバッ

双剣を斬り裂く。

緑色の血がどんどん出る。

「いつみてもこの血にはなれねえなあ」

トーマスは独り言を呟きながら、背中につけてある大剣に手をかざした。

「まだ来るわね」

イリスはそう言うところから魔物がたくさんでてきた。しかも怪物までもが出て来る。

「チッ…おまけ付きかよ」

トーマスは舌打ちをしてめんどくさそうに言い放つと、大剣を抜き、相手に突き進んだ

「お、おい待て、トーマス!!」

青龍は声をかけて止めるが…

「水の力よ、われの剣に力を与えたまえ…ビッグウェーブソード大波剣!!」

詠唱し、技名を言い、剣を地面に刺すと

大きな波が現れ、相手を襲う。

「甘いぜー!!」

と相手は言い、トーマスの後ろへ周り襲う

しかし、襲おうとした魔物はその場へ倒れた。

「甘いのはどっちなかな?魔物さん」

ソニックが言うと

「サンキューなソニックさん」

トーマスは礼を言った。

「トーマス!あれをやるか」

「ですね、ししゅう青龍」

青龍とトーマスは一気に相手に詰め寄った

「クロスブレイク!!」

大技を食らった相手は胸に大きな傷を負い、血を流す。しかし、それだけの大技に、二人の消費も激しい。

だが、それほどの大技なのに、相手に大ダメージを与えるものの、
急所には行っていないようだ

「まだまだ!!」

「おうよ!!」

「クロスツブレイク!!」

ズバツ

ようやく、相手は倒れた。バラバラとなった姿で。

「ハアハア…」

やはり流石の青龍でも肩で息をしている。

「これでもくらいな!!一火をまとう矢(フレイムアロー!!)」

そういうと、何本もの矢が火をまとうて、相手へ刺さる。

しかし、致命傷というわけではないようだ。

そんな刺さった矢も、すぐに抜かれる。

しかも傷は相当浅いようだ

「どんだけかてえんだよ。」

青龍はつぶやく。

「みんなに癒しを…ケアル!!」

リーフが言つと、皆の傷が少々治る。

「ありがとう、リーフ!!」

ソニックはそう言い、弾丸を撃ち続ける。

しかし、ソニックも相当な傷を負っているようだ。かなり命中率が
落ちている。

「さあーお前らの体も限界だろう…一気に殺してやろう…ヒッヒッ
ヒ」

と怪物が5人に向かって言う。

「皆さんさがってください。召喚します!!アライト召喚^{サモン}」

すると、地面から、アライトが飛び出してくる。

「力を貸してくださいっ!!」

リーフはアライトにそう言つて、後ろへ下がった。

「アライト、稲妻破壊光線^{サンダーボルト}!!」

そういうと、空から、何本もの稲妻が、相手を襲い、すべてが命中し、一撃で倒れていく。

そう、これがアライトの必殺技なのだ。

しかし、怪物は違った。

全く効いていないような状態であつたのだ。

「この程度の攻撃か…召喚獣もまだまだ弱いな…」

その召喚獣なくして、われに勝つすべなし。

デットレッド
「死の退場」

その呪文を唱えると、アライトは一瞬にして、消えてしまった。

「希望が…消えた…」

トーマスは膝をついた。

「じゃあな、愚かな者共よ、死んで悔いるがいい

連続魔法…サンダガ」

数々の雷が落ち、仲間らは倒れていく。

「…こんなことができるのか

そうか…なら同じ様二返シテモ構ワンヨナ？」

と青龍は言つた

デビルベルソナ
そう、魔人化したのだ。

その破壊力とスピードは召喚獣を上回ると謳われる魔人化。デビルベルソナ

「なるほど、聞いていた通り魔人化の使い手だったか

しかも、制御できている

実に素晴らしい実験台だな」

怪物が言う。

「さあ、お前らはここで休んでな…」

全員を避難させ

最後にソニックを運び終わると、何かの電流が走った。

すると、ソニックの体は青いオーラを纏っていた。

「ソニック…まさか扉を開こうと？」

10個あるスタイルの一つ、銃土化のガンマン

青龍は言う

「ああ、青龍の力のおかげで目覚めることができたよ、礼を言う。
ありがとう。」

ソニックはそう言い、進化した銃を見つめた

「これが、銃士化^{ガンマン}の扉を開いたら手に入るの武器か

…気に入った」

そう、10個の扉には、一つずつオリジナル武器が入っている。

ガンマンの扉を開いたら手に入る武器。

その名を「ガンストール」という。

オリハルコン製。装弾数は無限になる。

ちなみに、デビルペルソナで手に入った武器は

パワーストッキーと言う、オリハルコン製の双剣である。

「じゃあ片付けますか…奴を」

「だな」

ソニックと青龍はそれぞれ銃と双剣を構え、敵に向かった。

第10話 新たな扉（後書き）

どうも尾田博士です。

ソニックが新たな扉を開きましたねー

それも銃士化^{ガンマン}という。

他の扉もいつか開ける日が来ることを祈りますw
ではこれでー

第11話 ニュースキル

「弱者がどう強くなろうと所詮は弱者。我を超えられるはずがなからう。」

と怪物が言う。

「もう君に勝ち目はないよ。」

だって僕らが殺しちゃうもん……」

ソニックの顔から笑みが消え、相手に恐怖を覚えさせるような表情になった。

「ソニック、新しいスタイルを手に入れたんだ、使ってみるよ。」

青龍が顔に笑みを浮かべ言う。

「まかせてよ……あの怪物を粉々にするくらいにしてあげるから。」

ソニックが銃を構えて前に出た

「やっぱり何も変わっていないな……」

逆に隙だらけだ、バカメ……!!」

怪物はそう言っで、ソニックを殺すために殴りかかった。

「隙だらけだって？君の方も隙が多いんだね。」

ソニックは瞬時に怪物の背後へ回り二丁銃を当てた。

「は、はええ……わかった、わかった、なんでも言うことを聞く。

だから見逃してくれ!!頼む」

怪物は言った……が

「後悔しな……僕の仲間を襲い傷つけ、僕を怒らせたことを……」

ソニックはそう言っで引き金を引いた。

パン

森には銃声が響き、目の前には怪物の死体。

その死体からは緑色の血。

「しかし、凄いスピードだな、びっくりしたぜ

銃土化は敏捷なんだな」

青龍がおどいたように言う。

「いや、正確には、敏捷、命中力、射程速度かな
そのかわり、筋力パワーが犠牲になるけどね」

ソニックが言う

「やっぱガンマンだな」

と、青龍は笑って言った。

「あの魔人化デビルベルソナにはかなわないよ。」

ソニックは言う。

「まあ破壊力はそうだが、銃士化ガンマンの方が
長けてる点が多いじゃねーか」

青龍が言う

「まあどっちもどっちと言うことで!!」

とソニックが言う

「逃げたな・・・?」

と青龍はつぶやいた。

2人がそんなやり取りをしてると、ほかの3人も起きた。

「お、3人とも大丈夫なの?」

ソニックが心配そうに聞くと

「おう、大丈夫だ。」

「大丈夫ね」

「大丈夫ですよ」

と3人は言う。

「ところであの怪物はどうされたんですか?」

リーフが尋ねる。

「あ、ソニックが新能力ニユースキルでたおしたよ。」

と青龍が

「新技!?!」

トーマスが驚く。

「うん、青龍には、魔人化デビルベルソナがあるじゃん?

んで、そのスタイルには現在10個の扉があつて、
その一つの扉を僕も開いちゃったみたいでさ。」

ソニックが説明する。

「ほう…で、スタイル名は？」

イリスが効いてくる。

「銃士化。^{ガンマン}」

ソニックは一言で簡単に言った。

「良いですねー扉をあけることができるなんて…」
とリーフ。

「最初は制御が難しいけどな」
と青龍が言つと

「そういえば、僕のはなぜか、制御しなくても普通に使えたよねー…
覚え方の違いなのかな？」

とソニックが嫌味かのように言ってくる。

「だろうなー」

と苦笑いでその場を避ける青龍。

青龍もソニックも残るは9つの扉。

あの親父も扉を開いたんだろうか？と疑問を浮かべ、夜を過ごした

第12話 契約

迷子になり、怪物を倒して、道を進み、ようやく森をぬけだした5人は

今現在、再び迷子になっていた。

港に着くまでは長い道のり。

本当に長い道のりとなっているのである。

なぜならここは、砂漠なのだから。

森↓砂漠。

聞いたことねえよって言われても仕方無いような。

もちろん砂漠ということ、太陽はギンギン。

5人を苦しめるように陽が差ししてくる。

「森の次は砂漠かあ…こんなんモンスター出てきても戦う気にならねえよ…」

トーマスが言う。それを聞いた青龍は

「なら戦わなくてもいいんだぞ？トーマス」

するとトーマスが

「あ、いえ嘘です。すいません青龍さん」

謝るのであった。

「ほんとに暑いですね」

そんなことを言いながらもリーフは涼しそうに言う。

「だねー」

ソニックもそうであった。

この二人は内心と言葉が矛盾しているのである

「なんか矛盾してる気がするわね」

イリスが言う。

「と、言うよりこの砂漠を抜けないとどうにもならないな」

青龍が言うと、ソニックが

「そうだね」

その前にお迎えの様だよ」

そう言うと、空から大きな鳥のような怪物が現れた。そして、いきなり衝撃波を放ってきたのである。

もちろん、咄嗟とっさのことでは避けられるはずがない

5人は飛ばされて倒れる。

「チッ…まためんどくさい敵が出てきやがったな」

青龍はそう言い腰につけてある双剣を抜いた。

「まったく…僕を怒らせると怖いんだよ？」

とソニックは言い、二丁銃を構える。

「青龍さん！！あれやりましょう！！」

とトーマスが青龍に言うが

「いや…相手は空中だ、いったん地面に下ろして、やらないと意味がない」

と、言った。

「なら私の出番ね。墜ちなさい…サンダーアロー雷をまとう矢！！」

雷を纏った矢は相手に直撃。

その衝撃で怪物は態勢を崩し、地面へ落下。

「いまだトーマス！！」

「はい！青龍さん」

そして二人は息を合わせ

「クロス…ブレイク！！」

怪物の翼が斬り落とされた。

「よし！！次はもう片方のつば…え？」

ソニックが言葉を言いかけた。

ソニックの目線の先には、怪物があり。

その怪物の右の翼は落とされているはず。

また新しい翼が生え始めたのだ

「セルフヒーリングスキル自己治癒能力！？」

トーマスは驚く

「あれじゃ拉致があきませんねえ…本体全部を粉々にしない限り」

リーフが言った。

「俺もソニックもまだガンマンとデビルペルソナは最後に取っておきたいからな…何か言いアイデアはないのか…」

青龍は皆に言った。

（ねえ君！！）

青龍の後ろから声が聞こえた。

振り向いたが誰もいない。

（ねえ、君ってば！！）

もう一度声が聞こえた。

（！？）

青龍は驚いた。

（やあ、青龍君初めまして僕はこの砂漠の精霊、サ・ロードって言うんだ！！）

（精霊…？）

青龍は、砂漠の精霊を疑っている。

（そ、精霊。おそらく森の精霊も君についてるはずだよ。）

（ど、どうも）

（僕は君たちに力を貸そうと思って出てきたんだ！！）

（それでなんで俺に話を？）

青龍は疑問に思う。

なぜ自分に精霊は話しかけたのか？と

（そりゃあ、君が僕の力が活かせそうだからさ）

（そうか、じゃあ是非力を貸してくれ。）

（じゃあ契約だね、君の頭の中に双剣を浮かべて）

言われた通り頭の中にパワートリッキーを浮かべる。

（我、サ・ロードは今ここに青龍を主とし、契約することを誓う。）

（我、シン・イーロは今ここに青龍を主とし、契約することを誓う）

こうして、精霊と契約をしたのだ。

さあ、この精霊を使いどう、相手を倒すのか…

第13話 ニュースタイル

「さあ、殺^やるか」

青龍はそう言つて、双剣をしまつ。

（結局僕らをどうするの？）

砂漠…いや地の精霊が話をかけてくる。

（心配すんな、ローサもイーロも完ぺきに活かしてやるよ）

青龍は自信満々にそう返事した。

「ああ、そうだね」

ソニック言つた。

「地の精霊、森の精霊よ…我に力を貸したまえ!!」
すると、新しい双剣が現れる。

「……!?!?!」

驚くにも無理はない。パワートリッキーはしまつてあるのだから。それぞれ左手には、森の紋章の入った剣。右手には地の紋章の入った剣。

その武器をもつた瞬間青龍に新たな電流が…

魔人化とは別のオーラを纏い始めたのだ。緑色の

「この力は…?」

青龍は戸惑う。

「また新しい扉を開いたのね…」

イリスが言つた。

「え?また?どういふことですか?」

リーフが聞く。

まだリーフは知らないのだ、あの時はまだいなかったのだから

「青龍さんは魔人化つて言う扉も開いてるんだ。

前、俺達が城に運ばれた時があつただろ?

実はあれ、青龍さんの魔人化と戦つて、運ばれたんだ」

トーマスがリーフに説明をする。

「ああ、なるほど。そうだったんですか」

リーフは納得し、青龍に視線を戻す。

アパリシオンリヒングバーソナルトレーナー
「精霊使い!!!」

そういうと、双剣も緑色のオーラが。

「凄い力だね、こつちまでびんびん伝わってくるよ…」

ガンマン
銃士化!!!」

ソニックもスタイルを変える。

「しかし青龍さん、その力使いこなせるんですか？ソニックさんもリーフが二人に聞く。

「あ………」

そう、ソニックは一回使ったことがあるといえ、まだどんな風に戦えばいいのかを覚えていない。

しかも青龍は初めてのスタイル。

もちろん使ったこともないし、見たこともない。

どういう使い方をすればいいかわからない。

そんなスタイルを二人は今ここで使って相手を戦おうとしている。

もちろん不可能に近いだろう。

すべての扉は暴走しやす^{オーバーヒート}い。

ソニックは前回は短時間で終わらせたことで暴走をおこらない。

しかし今回も短時間で終わる。という確信はないのだ。

もちろん青龍も同じ。魔人化^{デビルベルソナ}じゃないからと言って油断はできない。

そんな二人は、何も考えず…いや青龍は勝手に発動したわけだがソニックは考えずに発動したのであった。

「おいおい…何も考えてないのかよ」

トーマスは苦笑しながら言う。

「ま、なんとかなるさ、な？ソニック」

青龍は気楽に言う

「だね」

またソニックも気楽に返す。

二人とも暑さを忘れてるようだ。

「とりあえずこの場合は彼らに任せましょう。」

イリスは言う

「そうですね」

危なければ、補助魔法かけますからね」

リーフはそう言ってさがる

しかしトーマスはその場に立つたまま。

「トーマス……？ここは彼らにまかせましょ」

イリスは言うが……

「断る……いくら姉貴の命令でも青龍さんやソニックに遅れはとりたくない」

トーマスははつきりとした言葉でそう言い残し、青龍とソニックと並んだ

「トーマス！？」

青龍は驚いてトーマスに声をかけようとしたが

「青龍さんが何を言おうとさがりませんよ？」

俺は俺の意思で戦うんです。

例えこれが最後の戦いとなっても。

そう言って相手に突っ込んでいった。

「バカヤロウ……」

これじゃあ扉開いた意味ねえじゃないかああああああああああ

ああああああ」

青龍は叫ぶ

「そこのの！？ トーマスが敵に突っ込んで行ったことに対してじゃなくて！？」

ソニックはツツコむ。

「わるい、ついノリで」

青龍は真顔で言い放つ

「いやノリとかそういう問題で言える状況じゃないと思うよ!？」

「まあ良いじゃないか、あいつの力を今なくすわけにはいかねえ……」

「ということとは…？」

「「助ける…！」」

青龍とソニックはそう言い残し相手に向かっていく。

「男って良いですねゝああやってカッコよく戦えるんですから」

三人の背中を見守りながらリーフが言った。

「そうね…でも時にはつらい現実を受け止める必要もあるの。」

イリスはそう言って三人の背中を見守った。

「トーマス、お前を今ここで死なせるわけには

いかないからな 力を貸すぞ」

青龍はそう言い放ち新しい双剣を持ち直す。

「じゃあまず僕が力を見せるべきだね…レベルアップした早撃ちを」
クイックトリガー

と言ってソニックは何個もある銃から

いつも使っている銃の一つだけを抜き相手に向けた

トリプルクイックドロウ
「三連早撃ち…！」

そういうと3つの弾丸を0.2秒で放つ。

その3つの弾丸は全て羽へえぐり込む。

セルフヒーリングスキル
「いくら自己治癒能力でも

中に入ったままの弾丸を取り出すことはできないでしょ？」

言葉通り完全には治っていないようだ。

「毒を弾丸に塗ったのか？ソニック」

青龍は聞く

「もちろんその通りさ。名付けて毒弾丸」
ポイズンブレット

ソニックは軽く笑みを浮かべ言う。

「小悪魔だな…」

トーマスはそう言って

「でも、これで奴に隙ができた！！一気にたたみかけましょうや」

こつも言った。

「だな」

青龍は同感して攻撃へ向かうが

またもや衝撃波でブツ飛ばされる。

「めんどくせえ野郎だ…」

（青龍…僕たち君のためにスキルを覚えたみたいだね）

サ・ロードが言っと、青龍が

（何だって！？教えてくれ、頼む）

（実は何かわからないんだ…覚えてることは確か見たいんだけど）

ロードはそう言った。

（そうか…）

青龍はそう言い返し、戦闘に戻る。

「しょうがねえ野郎だ…片っぱしから攻撃しまくってやる。」

そう言って敵に突っ込んでいく青龍であった

第14話 激戦、新技

怪物の周りには多くの魔物が現れる。

どうやら、青龍、ソニックの強力な魔力が呼んだようだ。

もちろん、どんどん増えるためだけ倒そうがキリが無い。

そんな事を気にせず青龍、ソニック、トーマスの三人は片っぱしから倒していく。

「全然へらねえなあー」

トーマスはそう言いつつ大剣で敵を斬る。

「だねー…それにこのスタイルのままじゃきついかも」

ソニックは言う。やはり体力の消費も激しいらしい。

「さてと…じゃあ本命をぶっ潰しに行きますかね」

青龍はそう言つて一気に周りを吹っ飛ばした。

「え？でも一発で仕留めなきゃ意味が無いんじゃない？」

ソニックは言う。まあ、そうだろう。自己治癒能力がある限り。

「まあそうなんだが、実際それを無くす方法もあると思うんだよね…」

ヒールング

スピード

ターゲット

回復が追いつかないくらいの速さで相手を攻撃し

ぶっ潰すつて言う手も感じで」

青龍が一つの案を出す。

「じゃあ青龍さんの案を試そうぜ、それがダメなら、どうするかだけだな」

トーマスが仕切る。仕切っていることに対して

青龍、ソニックの二人は納得いかなそうだったがそこは関係なく

「そうだね、やってみる価値はあると思うよ」

ソニックが言うと、青龍が

「じゃあ実行だな、俺が合図したら皆で一斉に攻撃だ」

そう言うと、三人ともしっかりと武器を構え、合図に備える。

「…GOー!!」

青龍の合図によって連続技が繰り出される

「サウザントクイックドロウ
100連続撃ち」

「ラッシュアタック
連続突き」

「ラッシュコヒックウェーブ
連続大波」

「どうやら皆新技のようだ。」

「攻撃は収まり、三人は相手を確認する。」

「予定なら、跡形もないはずだが」

「生き残…ってるだど？」

「トーマスは驚きながら後ずさりする。」

「あんだだけの早業を出しても死なないなんて」

「ソニックも驚く。」

（青龍！！力を貸すよ、もう技をやり方は体に伝わってるはずだから、勝手に名前も出るはずさ！！）

「サ・ロードが言う」

（そうか、わかった。やってみるわ）

「青龍は返事をし、双剣を構えなおす。」

「クエイクウィンドフンド
地の風剣！！」

「そついうと青龍の周りの地面から風が吹き出した。その風により、地面の一部分が浮き岩になる。」

「それにつられて、石などが浮き始める。」

「その浮いた岩やら石やらを精霊剣の横払いの時の風圧で飛ばす。」

「クエイクウィンドフニック
地の風波」

「連続技だ、またもや先ほどと同じような感じで浮き上がり、精霊剣」

「の指した方向へ飛ぶ」

「まだそれだけでは終わらない。」

「クエイクウィンドウカット
地の風斬り」

「風に乗り、岩やら石やらを運んでいる風ごと相手を斬る。」

「ラストだ…
チエックメイト
地の風終点」

「そう言つて精霊剣を上に向けて指を鳴らす。」

「落ちてきた精霊剣を直接取り、交差させるように斬りつける。」

「これが精霊一式目地風連打」

そう言っていると、怪物は一気にバラバラになり、砂となって風に運ばれていった。

「スタイル解除」

「スタイル解除」

ソニックと青龍はそう言つて、スタイルを解除した。

解除すると青龍の精霊剣は消える

アバリションソード
アバリションリビングトレイナー

「なるほど、精霊使い状態でしか解放されない剣なんですね」

トーマスが青龍に言う。

「そうらしいな。」

青龍が答えると

「じゃあ彼女たちのところへ戻ろうか」

ソニックはそう言つて後ろを向き歩き出す。

それを見た青龍、トーマスの二人も一緒に歩き出した。…が

バタッ…

なんと青龍とソニックの二人が倒れたのだ。

「青龍さん？ソニック？大丈夫か！？ちょっと待ってろ、今すぐリ

ーフを呼んでくるから！！」

そう言つてトーマスは走りだした。

（1時間後）

なぜか5人は砂漠を抜け港町へ着いていた。

リーフの無属性魔法。「瞬間移動^{テレポート}」で移動したのだ

早速、宿屋へ入り、青龍とソニックの二人をベットへ寝かせ、

トーマス、リーフ、イリスの三人もベットで休憩したのであった。

こうして、砂漠を抜けだし、港町へ到着したパーティーであった。

第15話 黒魔導師登場

砂漠での戦いの翌朝：

青龍とソニックの二人は目を覚ました。

それもリーフのおかげ…やはり回復魔法を持っている仲間がいてよかっただろう

「青龍もソニックも大丈夫なのかい？」

イリスが二人に聞く。

「ああ、もちろん」

青龍が答えると

「もちろんさ」

とソニックも答える。

「ところで、ここ港町なんだよね？」

ソニックは聞く

「ああ、そうらしいぜ」

トーマスは答える。続いてリーフが

「じゃあ、港へ向かいましょうよ」

急かすように言う。

「いや、まだここにいた方が良さだろう。」

青龍が言う

「そうだね、少し戦力を整える必要があると思うからさ、

もう少しここに滞在して行こうと思うんだ。リーフには魔力を消費させてしまったし。」

ソニックも続いて言う。

「そうだな、そうしよう」

青龍はそう言っ、解散と言い放った。

「ところで青龍、僕たちには仲間がもう一人、二人必要だと思うんだ」

二人になったところでソニックが青龍に言う

「まあ、だろうな。今のところ接近が俺とトーマス。

中距離にソニック、イリス。そして補助にリーフ。

できれば遠距離がほしいな、それと接近で盾になれるやつ。」

青龍がそう言う

「だねー、どうやって集めようかな。」

ソニックは考えようとするが

「いや、集めようって考えるより普通に行動していた方が自然と集まる気がする。

だから俺たちはちょっと街から出て、鍛えておこつや」

青龍はそう言つて横にあつた鞘に納まっている剣を二つ取り、腰に付け、立ち上がる

ソニックはそれを見ると、自分も横にあるガンホルダーと二丁銃を取り腰回りにセットし、立ち上がる

「さあ、行こうか？青龍」

「そうだなソニック」

二人はそう言いながら顔を見合わせ、前を向き宿を後にした。

二人はその後、街の外へ出て、森へ入った。

その数分後。

「迷つたな」

「迷つたね」

二人は迷つたらしい。どれだけ迷うのだろうか。

そんな二人を複数の敵が囲む。

「んーこんな状態で囲まれたくないねー」

ソニックは困つたように言う。

するとどこから・・・

「ファイア！！」

と声が聞こえ、周りを囲んでいた敵の一体が火に包まれて消える。

「黒魔法！？」

青龍は驚いて後ろを向く

「君たち後ろを向いてる暇なんてあんのー？」

謎の声が聞こえる

「そうだな、さっさと片付けるか。冷凍円」
フリーズサークル

青龍は唱える

「お、久々に出た」

ソニックが言う。

複数の相手を白い円が囲み、一気に空まで届くような氷の柱ができた。

「俺達に会ったのが、運の尽きだ」

そう言つて、片方の鞘から剣を抜き、氷の柱を一刀両断。

「凄いなー君たち。名前は？」

後ろから女の声。どんどん近づいてきて、二人の前でとまる。

「俺は青木青龍」

「僕はアルバ」ソニック

二人が名乗ると

「私は、霧咲京子」
きりさききょうこ

黒魔導師ね、見た感じ青龍君は双剣使いだったけど、ソニック君は？」

と、霧咲が聞く

「僕は二丁銃の使い手だよ」

軽く笑みを浮かべて答えるソニック。

「なるほど！それで腰にガンホルダーがあつたのね、ところで二人はなんでこんなところに？」

「「迷つた」」

見事にハモる

「じゃあ、案内してあげる、港町まででしょ？話したいこともあるし」

霧咲が言つと

「本当か？なら頼む」

青龍が答える。

「その話つて言うのは、私を仲間に加えてほしいの」

霧咲が言う

「別に良いよ」

ソニックの即答

「早ッ!!」

というわけで仲間が増えたのであった。

ほかの三人の事も話、その三人にも霧咲の事を話した。

そして、仲間も加わったことで、大陸を渡ることにしたようだ。
ようやく、この大陸を出るときが…

第1章〜完〜

第16話 船上での戦い

5人に新しい魔導師を迎え6人になったパーティーはもう大陸を離れ、

船で新しい大陸へ向かっている途中であった。

そんな中船ではトーマスが同じ冒険者と仲良くなっていた

「こんなところでの話もあれだし、中で話そうぜ」

トーマスはそう言っ、船の中に入ろうとする。

「そうだな、酒でも飲みながら」

冒険者はそう言っ、トーマスについていき、中に入った

「そういえば、名前を聞いてなかったな、なんて言うんだ？」

トーマスが尋ねると

「俺はキーン・エミリー。お前は？」

エミリーと名乗った男が聞き返す。

「俺はトーマス・エリー。」

そう名乗り、二人とも椅子に座ると、注文をして、話し出した。

そんな中トーマスを除く5人は

「何か、別の冒険者さんと仲が良くなったみたいですね」

リーフが言っ。

「そうみたいね」

イリスが答える。

一方青龍、ソニック、霧咲は

「なんだかいやな予感がするんだが…」

青龍がそう言っ

「そうよねーなんか、感じる。」

霧咲も言っ。

「そんなときゃそんなときでしょ。」

数時間後トーマスは飲み終えたらしい。

未成年ながらも飲酒。本当なら捕まるね

こうして皆は船の中にあるベットで眠りにつく

（翌日）

「んっー朝か。」

青龍はそう言いながら起き上りベットから出た。
するといきなり扉が開き、エミリーが入ってくる。

「おいトーマスお客だぞ」

青龍がトーマスに言うつと

「なんだ？エミリーか」

そう言つて起き上り、ふら付きながら、歩く。
タッタッタッタ

エミリーはいきなり青龍の方へ走りだす。

「青龍さん危ない！！」

トーマスがそう言つて青龍の前でエミリーを止める。

「なんだ！？」

青龍は驚く。

そのすきにエミリーはトーマスに掴まれたナイフを離して逃げ出した。

「おっ、おいまっ…」

バタッ

トーマスは倒れる。

「頭がいてえ…飲みすぎた…」

「なんだ、二日酔いか、俺に任せておけ。」

青龍はそう言つて、走つてエミリーの後を追いかけて、外に出た。

エミリーは武器を出している。うっすらと後ろに黒い魔物の影が見える

「魔人化…？いやただ乗り移られてるだけか…」

青龍は推測して、片方の鞘から剣を取り出す。

「ていうか、こんなところで戦つて船壊れねえかな」

そんな事を気にしながらも、相手に突っ込む。

「乱れ撃て、氷剣」
ブリザードソード

そう言うと、パワートリッキーが氷柱をまとった。

その剣を振り抜くと、パワートリッキーをまとっていた氷柱がエミリーの方へ飛ぶ。

しかしエミリーは、その全てを持っていた剣ではじき落とす。

「チッ…人の新技をそうやって跳ね返してくれるなよ」

青龍は舌打ちをしてそう言うと、もう一度、氷柱をまとった剣を振り放つ。

しかし、またもやエミリーにはじき落とされる。

「…ヤロウ、そろそろ本気でいくかな」

そういうと、腰に付けてあるもう片方の鞘から剣を抜き出し、双剣を装備した。

「後悔すんなよ氷双剣」
ダブルブリザドソード

そういつて双剣に氷柱をまとい、またもや突進する。

「強化だ、冷凍剣」
フリーズソード

その氷柱をまとった双剣にさらに冷気をまわせ強化する。

氷柱と冷気をまわせた双剣を振り抜き、地面に強く叩きつける。

すると、双剣からはもちろん氷柱が飛んでいき、

叩いた地面を冷気と、氷の線がはしる。
ブリザドライン

氷柱をはじき落とし、即座に氷の線をよけたエミリーの足元に円ができる。

「掛ったな？冷凍円」
フリーズサークル

そう唱えた途端に氷の柱ができた。

「残念だったな…」

そう言つて、片方の剣で切り落とした。

そして、氷の結晶となり、風に運ばれて消えていく。

そこへ、5人が駆けつける。

「大丈夫？青龍」

ソニックが青龍に近寄り聞く。

「ああ、問題ない。向こう自体攻撃をしてこなかったからな」
青龍が答える。

「それと、エミリーは何者かに操られていたみたいだな、後ろの方に魔物の影がタブってた」

青龍はそう言ってトーマスの方へ見る

「許せねえ…俺の友達を…ぶっ殺す」

トーマスは握り拳を作り壁を殴った。

く同時刻船の影からく

「…エミリーが倒されました…ええ、ですね…わかりました…では、実行に移ります。」

と謎の男が何者かと話しているのであった。

第17話 新大陸

大きな大陸。オマストリア大陸についた、青龍をはじめとする6人は新天地に新たな一步を踏み出していた。

もちろん、アスカンディア大陸の街とは違い、大きな都市であった。「で、ソニック最初の城はどの街なんだ？」

青龍がソニックに聞く。

「この街の奥の方だねー」

ソニックが答えると

「ならどうするの？今から行く？それともいったん宿で休んでから？」

イリスがソニックに尋ねると、

「もちろん、今すぐ行くに決まってるだろ、姉貴！」
なぜかトーマスが反応する。

「別にアンタに聞いているわけじゃないんだけど…」

イリスは手を額に当ててうつむく。

「どうしよっかー、多数決で行こうかなー」

ソニックは、かるーく言う。

「多数決って…適当すぎじゃない？」

霧咲がソニックに反論(?)する。

「そうですね、そこはきっちりとした方がいいと思います。リーダーが」

リーフもそれに乗っかって言う。

最後の「リーダーが」という言葉で皆が青龍の方を一瞬にして向いた。

「…(汗)…俺…？」

青龍は困ったように言うと

「もちろん」

ソニックが言った後に続いて

「そりゃあ青龍さんしかないでしょ!!」

トーマスも言う。

「じゃ、じゃあ…多数決で」

青龍がそう言う。

「………かわんねーじゃん!!」「………」

一斉にツッコミが飛んでくる。

「わるい、軽い冗談だ。宿へは寄らずにこのまま、城へ行こう」

今度はしっかりと結論を出す青龍

「よっしゃ、そうと決まれば行動だ!!」

トーマスはそう言って、先頭に出て進む

「あんた先頭に出るんじゃないわよ、普通ソニックと青龍でしょ」

イリスはトーマスにそう言って、またもや手を額に当てる。

そして、ソニックと青龍が先頭へ出て城へむかって歩き出す。

その時、

「お、おい、城の中で反乱がおきてるらしいぞ!!」

村人が叫びながら慌てて走る。

「良い情報を手に入れたね」

とソニックが言う

城の中で反乱などと普通は良いことじゃない、この6人がやりたいこととしては良い状況であろう。

「よし、ならその反乱をしずめ王様に信用してもらおうぞ!!」

青龍はそう言って、走って城へ向かった。

それに続き、ソニック、リーフ、トーマス、イリス、霧咲が走っていく。

数分後

着いた先は立派な城だった。

「さあ、途中開始だ!!」

青龍が先陣と切って突入。

それに続いて5人も後ろから突入する。

近くを、城の兵であろう人が通る

「すみません、俺達城内で反乱がおこったと聞いて来たんですけど、
どういう状況なんですか？」

青龍が兵士に聞くが、

「…」

兵士は答えない。

そのうちに兵士は構えていた武器をこつちへ向け襲いかかってきた。
「なるほど、あんたも敵って事か、ならこうさせてもらうまでだ」

腰につけてある2つの鞘の片方から剣を抜き、兵士を斬り落とした。

「青龍やるねー、人相手に」

ソニックが言った

「いや、この人、もう人間じゃないよ」

死体を調べていた霧咲が顔をあげてそう言う。

「それってどういうことなんだよ！！」

トーマスは強く言った。

「おそらく、術式による洗脳だろうな」

青龍は冷静にそう言って、鞘に剣をおさめた

「なるほどね、それじゃあ洗脳された兵士が内部反乱を起こしたっ

て事だよな？青龍」

ソニックが聞く

「ああ、その通りだ。おそらく魔物関連の術者だろう」

青龍がそう答えて

「ここからは2つのグループに分かれて行動したいと思う。」

こう言った。

「どついう風に分かれるのさ」

イリスが聞くと

「まず、右の階段を左の階段がある。右の階段からは俺、霧咲、イリス。」

「分かった！」

「分かったわ」

霧咲とイリスは返事をする。

「左の階段からは、ソニック、トーマス、リーフ。」

「りょーかい」

「必ず期待にこたえて見せます。」

「分かりました!!」

ソニック、トーマス、リーフと返事をし、分かれる。

「次に会うのは最上階だ。以上!!」

青龍がそう言うのと、2つのグループは左右に散って走り出した。

「ねえ、青龍、あたし足手まといかもよ？」

霧咲が心配そうに言うが

「そんな事はない、お前の黒魔法はとても大事だし、役に立つ。決して足手まといなんてことにはならないな」

青龍はそう説明し、階段を駆け上がる。

「ここがお前らの年貢の納め時だあッ」

と言いながらいきなり目の前に兵士が現れる。

「洗脳者ね……」

イリスがさびしそうに言う。

「しかし、言いまわしが古いな、年貢の納め時だなんて」

青龍はさりげにツツコミを入れる。

「いや、今ツツコンでる場合じゃないからね？青龍」

霧咲はそう言っ、黒魔法を唱え始める。

「霧咲止めておけ。お前の力を使うまでもないだろう。」

青龍はそう言っ、イリスの方へ見る

「自分ではやらないのね…分かったわ潔く逝きなさい。三連矢」
トリプルアロー

そう言っ、イリスは三連続で弓を放つ

すると三本とも兵士に刺さり、一本は心臓へ突き刺さった。

「さあ、行くぞ。休んでる暇はないからな。」

青龍はそう言っ、また走り出した。

一方ソニック達は

「なんか敵が全く現れないねー、もしかして当たりかな？」
ソニックはそう言いながら走る。

「残念、ハズレだぜ」

ニヤニヤしながら変な怪物が現れる。

「おいおい、こんな城に怪物なんて入んなよ…」

トーマスはそう呟いて、グラ大剣を引き抜き、相手を斬る。

「早いですねー、じゃあ行きましようか。」

リーフはそう言って走り出そうとするが

「いや、まだだな…死んだ気がしない。」

トーマスはそう言って、死体を見直すと、斬り落としたはずの上半身と下半身が再びつながっている。

「チツ…まあいっか、ソニック、リーフ先に行っててくれ、俺はこいつを粉々にしていく。」

トーマスは相手を睨みつけたまま、そう言った。

それを聞いた二人は走って階段を駆け上がりだす。

（少しは『僕も加勢するよ』なんて言っただけだったんだが…）

そう心の中でさびしく呟いて、また相手に突っ込んで行ったトーマスであった。

第18話 天気を操る技

相手に突っ込むトーマスを後にして、ソニックとリーフは階段を駆け上がっていた。

一方、青龍、イリス、霧咲の3人は順調に階段を上り、5階にいた。そんな3人が6階へ上がる階段へと行く途中、天井を突き破って魔物が飛び降りてきた。

「めんどくさい奴らだな、イリスここは任せる、俺達は先に上がってるから」

青龍はそう言つて、リーフを連れて、階段を走って上がって行つた。「え、ちょ、待ちなさいよ……ってもういないし……」

そう言つて魔物の方へイリスは振り返つて

「ハア……まあいつか、早く片付けていこうじゃないの」

イリスはそう言つて、弓と矢を取り、相手に向けた。

その頃、トーマスは、魔物との激戦を繰り広げていた。

「良く避ける野郎だ、黙って斬られれば良いものを」

そんな事をいいながらも、楽しみながら戦っている様子である。

「じゃ、そろそろ本気を出させてもらつても良いだろうか？ ああん？」

喧嘩口調で言いながら、大剣を持って、魔物に詰め寄る。

そして、一刀両断のもとに相手を斬り落とした。

「お遊びが終わつて残念だったな。」

こっちも疲れるのは嫌なんだ、本気でいかせてもらつたぜ」

トーマスはそう言い、大剣を背中にある鞘におさめ、また階段を上りだした。

一方、イリスの方は、いつの間にか、外に出ていた。

近くにあつた窓から飛び出たのだらう。

「しつこいねえ、アンタ。しつこい奴は嫌いだよ……っても男か女か分からないや」

と言って、矢を構える。

「この矢は、雷いかづちを呼ぶ。」

また矢を構える

「この矢は、強風を呼ぶ。」

そして同じように矢を構え

「この矢は、豪雨を呼ぶ。」

そう言うて、三本の矢を一気にひき放つ。

すると三本の矢は塵となり、空に舞い上がる。

「一の矢、落雷」

そう言うて、魔物に向かって、雷が落ちるが、難なく避けられる

「まあでしょうね。予想はできるわよ、そのくらい。」

次の矢、雷風サンダーウィンド

と言うと、強風が吹き、その強風につられ、落雷も激しくなる。

しかし、それを必死に避ける魔物。

ラストオーダーウィンドーサンダーレイン

最後の矢、風雷雨

そういうと、強風につられながら、落ちていた雷と共に雨が降り始める。

「その雨…変わるよ」

イリスはそう言うて、空を見上げた。

その雨は矢に変わり、雷を良く通す矢になる。

より、落雷の速度が速くなり、矢も残った電力でどんどん強化されていく。

矢は1秒間7本ほど落ちるが、雷はそれより早くどんどん、落ちる。

流星の魔物もそれをよけられず、矢と雷をどんどん喰らう。

そして、魔物も最後の抵抗として、イリスに突っ込んで行くが、

「残念、そこは、降矢地帯こじやよ」

イリスがそう言うて、城へ向かって歩き出すと、

魔物の上に、数百本…いや、数千本の雷と矢がまとまって、できた岩のようなものが落ちる。

そして、その下にいた魔物はつぶされたのだった。

ウェザーアロー
これが天気矢。

「ここで時間をつぶしてる暇は無いの、残念だけど、先に行かせてもらっわね」

イリスは振り返りもせずそう言っで、立ち去った。

その頃、青龍と霧咲はやはり必死に階段を上っていた。

すると、今度は目の前にいきなり暴走したロボットが現れる。

「あの機械もぶっ壊していいのかなあ？」

霧咲がそう言いながら、オーブを持ち直す。

「わかんねえ…けど、俺らに危害があるなら、ぶっ壊せば良いんじゃない？」

青龍はすんなりそう言っで、横目で暴走したロボットを見る

「なら、壊しても十分だね、ファイヤ」

軽くそう唱えると、急にロボットは燃えだした。

「すげえな、黒魔法。いままで白魔法しか見たことなかったから、そんなに威力があるとは知らなかったよ」

青龍は驚いた口調で、霧咲を見る。

「ま、下級魔法だからそうでもないんだけど、上級…いや最上級まで来たら最強だよ」

霧咲は軽く言っで、先に階段を上がって行っだ。

しかしまだ、最上階までは長い。どこまでいくのだろうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7544r/>

To make the new world

2011年10月8日22時03分発行